

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

税理士法人 優和

経営者への活きた言葉

 TEL 03-3455-6666
 FAX 03-3455-7777

経営者への活きた言葉

東芝、日立の格差の源流（その1、日立のハングリー精神と汗臭さ）

1. 東芝と日立製作所の社風は正反対といっているほど違う。その違いは、両社の成り立ちを考えると理解しやすい。東芝は創業時より三井財閥から資金、米国の名門ゼネラル・エレクトリック（GE）から技術の支援を受けて育った。初めて工場を建設した場所は何と東京・銀座だ。「働く環境が悪ければいい知恵も出ない」という米国流の合理主義が根付き貫かれていた。
2. 他方、日立は創業時の小屋はお世辞にも立派とはいえない。1961年の本誌には、こんな記述がある。「日立は日本一のマンモス企業となっただけでも新丸ビルの一角にビル住まいしているが、驚いたことに、このオフィスには冷房がない。それに狭く、どの部屋も机でいっぱいだ」。日立のハングリー精神と汗臭さが伝わってくる。
3. 創業時から「国産技術」を錦の御旗を掲げる日立は、独立精神が旺盛で財閥系企業や外国技術に立ち向かった。「日本一のマンモス企業」の地位を築くころには比類なきたくましさを身に付けていた。日立が「野武士」と称されるゆえんだ。一方、東芝の社員は競争心が乏しい。ある東芝OBは、「工場が首都圏にあって転勤が少ないから入ったという人が多かった。商売っ気がある日立にはかなわない」と言う。東芝には日立の「野武士」に相当する結集軸がないといえる。

（参考：「週刊ダイヤモンド」2018年11月10日号）

ワンポイント経営アドバイス

倫理・道徳に反する経営が生じる理由

川野 幸夫（ヤオコー会長）

1. 経営とはつくづく「理」と「情」のバランスだと思ふ。うちの会社はどちらかといえば、「情」の部分が強い方だと思ふが、やはり論理的に進めなければ会社の発展は望めない。一方で「理」だけでも、会社は回らない。「理」があって、それを「情」が包んで動かしていくのが会社だと思ふ。
2. 昨今続いている企業の不祥事も「理」の部分が勝ち、「情」である理念が欠落してしまった結果起こっているのではないだろうか。どの会社も人間の倫理や道徳に反することは理念として掲げていないはず。むしろ人の役に立ちたいという思いがあって生まれた会社がほとんどだろう。そのなかに倫理や道徳に反することをしてしまうのは、経営者が会社の培っていた本業の理念をしっかり伝えていなかったり、伝えていたとしても表面的なものになったりしたからではないか。

（参考：「日経ビジネス」：2018年12月3日号）

人事・労務について

心が乱れたときの対応

梶野 俊明（徳雄山建功寺住職）

1. 人間であれば、心が乱れるのは当たり前です。大切なのは、心がざわついたときどう整えていくのか、ということでしょう。心がざわつく大きな原因の一つに情報過多があります。現代は情報化が過剰に進んでいて、知らなければ何とも思わなかったのに、知ったがために物が欲しくなったり、みじめになったり、頭に血がのぼったりします。
2. 情報のなかで、もっとも人の心を乱すのが他人との比較です。「隣の芝生は青く見える」といいますが、周囲の仕事や収入、環境と自分の現状を比較すると、周囲のほうがよく見えてしまうのが人間の性です。では心が乱れたとき、どうすればいいのでしょうか。まずは、「今、ここ、自分」がやっていることが一番すばらしいと考えて、目の前のことに全力で取り組むことです。

（参考：「PHP」2018年12月号）

古典に学ぶ

智、情、意を平等に備える

（解説）常識を学理的に解釈すれば「智、情、意」の三者が各々権衡を保ち、平等に発達したものが完全の常識だろうと考える。更に換言すれば、普通一般の人情に通じ、よく通俗の事理を解し適宜の処置を取りうる能力がすなわちそれである。

（参考：洪沢栄一「論語と算盤」：国書刊行会）